新 刊 Book reviews

□ローター・ミューラー（著）三谷武司（訳）：**メディアとしての紙の文化誌** A5. 400 pp. ¥4,500+ 税. 東洋書林. ISBN 978-4-88701-813-0 C0020.

L. Müller：Weisse Magie：Die Epoche des Papiers (2012) の邦訳. かねてから，貝多羅葉紙はどんなものかと疑問を持っていたので，紙というものの発生から説いているのかと思ったらそうではなく，中国の植物繊維由来の紙やエジプトのパピルス紙の話は省かれていて，アラビアから欧州へ伝わったボロ布や古縄を原料とする紙の話から始まる．この製紙法は，AD 105年頃に中国で開発された蔡侯紙の技法が，イスラム世界経由で伝わったものなのだが，本書はそういう発達史が目的ではないので，気にしなくてよかろう．水車を動力源として，これらの素材を短い繊維にまで叩解し，獣骨を粉砕して得た膠質を混ぜてシート状に拡げ乾燥する工程は，多量の水と燃料を消費した上，多量の汚物と汚水を発生する一大工業だったようだ．もっとも，今日の言葉で言えば，有力な「資源再利用」とも言える．この段階を元に，木材チップを原料とする製紙工業に発展するのだから，話をここから始めるのももっともである．

こうしてできた「紙」という製品は，それまで使われていた媒体に比べて，文字を介しての情報の表現の自由度を格段に拡げたばかりでなく，印刷技術の発達で，多量の文字情報，図形情報を短時間で広範囲に頒布することを可能にした．一方では紙幣などの有価証券が，それ迄の貨幣に頼っていた経済活動に大変革をもたらした．他方，諸々の約束ごとや手続きを一々紙で記録することになり，それ迄は口頭で済んでいた世の中の仕組みが大きく変わることになった．これらの事例が次々と示される一方，文学作品の表現法の進化の話は大変念入りで，多くの著者の多数の作品について例示されている．いわゆる古書の中には，読者のメモや意見を記すために周囲の余白をわざと広くとったものがあって，ヨーロッパの古書店を念入りに見て歩くと歴史上の人物の書き込みや，無名の碩学の意見表明を見つけたりすると，古典学者の記事を見た覚えがある（久保正彰成蹊会誌 No.102, 2005）．印刷術以前の写本の時代から，本の余白というものは伊達に存在しているわけではないのだ．読者の感想や思いつきを記入するために，間紙（あいがみ）という白紙が毎頁ごとに入っている本もあるそうだ．本の厚さが倍増していることになるが，これも紙の供給が豊富だからこそと言える．そう言えば本書でも，頁下端の余白が広くとってあるのは，書き込みの便宜のためなのだろう．「本は神聖なもので，汚してはいけない」と教えられた者にとっては，意外な利用法だった．古書目録では「書き込みあり」や「よごれあり」は安い値段がついているが，ものによっては数百倍の値段になるものもあるようだ．印刷機の急速な発達がトランプカードの需要急増によって促された，という指摘は面白い．

最後の方になって，最近の文字情報の電子情報化や電子出版と従来の紙媒体による発表・保存との得失が論じられているが，本文383頁中，7頁を占めるに過ぎない．本書執筆中には，ペーパーレスの電子図書はまだ話題に上るまでに発達していなかったのでやむを得ないことなのだが，この件については全然もの足りない．次回の執筆ではこの部分が本書の主題になるだろう．訳者が指摘するように，情報の更なる蓄積・消化が期待される．

巻末に280件ほどの索引が付いているが，人名や文学作品名と技術用語とは別建てにした方が使い易いような気がする． （金井弘夫）

□盛口 満：**雑木林は不思議な世界** B5. 167 pp. ¥950+ 税. 山と渓谷社. ISBN 4-635-00812-6 C0345.

見開き2頁ごとの読み切りで，雑木林に住む小さな昆虫や菌類が主題なのだがそれらが活躍の場とする木々のことが巧みな線画で示されていて引きつけられる．そういう虫たちはわれわれが植物を観察・採集するときにも目に入っているはずだがどうも印象が薄い．でも夏になって，実をつけたコナラの枝先がたくさん落ちていても，カラスがいたずらでもしたのかと見過ごしてしまう．しかし本書でその理由を知ると，拾って実のつけ根に産卵痕がないかと調べてみたり，実を割ってゾウムシの卵を発見したりする．山で栗を拾って置いておくと，虫がゾロゾロ出てくる．あるいは葉の虫食い跡を，ハキリバチやハモグリバエと関連付けた標本として残すことも有用だと思うようになるだろう．モモのゼリー状の樹液が，水彩絵の具の定着剤に使われていた…という話を読んで，アルプスで見つかった新石器時代のアイスマンの

記事に，その時代には矢尻の接着剤に *Betula* の樹液が使われていたという話を思い出した．マツの根元に落ちている「エビフライ」は，その形で作り主がわかるそうだ．植物観察に向けていた目が，少し視野が拡がって，自然観察になってくる．（金井弘夫）

□山本紀夫：**ジャガイモのきた道．文明・飢餓・戦争** 新書版．204 pp．¥740+ 税．岩波新書．ISBN 978-4-00-431134-8 C0245

先に紹介した「ジャガイモとインカ文明」の著者が，南米原産の有毒成分を含むジャガイモが，インカの人達の主食として選択されるに至った経過，そのヨーロッパへの導入による食料危機の回避とその故に起った飢饉，さらにヒマラヤの食生活への浸透，日本への導入など，世界の食生活に及ぼした影響を語る．ジャガイモは，コロンブスのアメリカ発見（1493 年）後，すぐに欧州にもたらされたトウモロコシのようには，有用性が気付かれなかった．インカを征服した（1532 年）スペイン人は，ジャガイモがインカ人の食物だということは認識していたが，イモという作物は欧州人にはなじみがなく，穀物を主食とする彼らには低級感があって，欧州に導入されたのは 40 年ほどたってからだという．日本でも，トウモロコシ文化説が優勢な中で，著者がインカ人のジャガイモ文化説を唱えた際，「ジャガイモなんかで文化ができるものか」と言われたそうだ．

欧州に輸入されたジャガイモは風土に合っていて，広く栽培され，それまでにはしばしばおこっていた飢饉の被害を和らげるのに役立った．一方，収穫量の多い品種にばかり頼ったため，アイルランドでは病原菌の爆発的蔓延で，餓死者を出すほどの大飢饉になったという．原産地のインカ人たちがそういう目に合わないのは，狭い畑にジャガイモの 30 種類を超える品種ばかりか，別の科（*Tropaeolacea*）のイモさえ混植し，しかも頻繁な休閑期を挟むため，病原菌やネマトーダの繁殖が抑えられているためだろうとしている．その代わり，収穫量は生活ギリギリの線だという．ヒマラヤ地域でも「シェルパの伝統料理はジャガイモ」と聞いていたが，そんな筈はないと，私は思っていた．著者はシェルパの郷里のソロ・クーンブ地域で調査を行い，ジャガイモは確かにシェルパの日常食となっているが，その導入はせいぜい 50 年くらい前のことだろうと推定する．日本への導入は，とくに北海道，東北地方の飢饉対策として有効だったとしている．最後に著者は，世界の人工爆発の対策として期待される国際ポテトセンターの事業への日本人研究者の参加がないことに危惧の念を表している．（金井弘夫）

□浅井元朗：**身近な雑草の芽生えハンドブック** 110×180 mm. 120 pp. ¥1,400+ 税. 文一総合出版. ISBN 978-4-8299-8111-5 C0645.

環境調査を業とする人たちの話しを聞くと，依頼元の予算執行時期の都合で，花や果実を確かめてから同定するような悠長なことはしておれず，土を保温器に入れて，出てきた実生を同定せねばならないこともあるそうだ．広大な畠や牧草地では，成長力の旺盛な有害雑草は，芽生えのうちに同定して早めに対策を講じる必要がある．従来芽生えの図は，桑原義晴氏や浅野貞夫氏の作品などが知られているが，本書は芽生え専門のハンドブックを目指したものである．

本書では約 100 種類が扱われている．それらについては 16 頁以降に 1 頁 2 種類（ものによっては 1 種類）ずつ，子葉，第 1 葉，第 2 葉，それ以降の段階での姿が，いずれも拡大写真で示され，簡潔な説明がつけてある．拡大なので見易いのだが，その実際の大きさは 8–15 頁の「原寸大芽生え一覧」にあるように，おそろしく小さい．頁の端に付けてある mm の目盛りと比べればわかる．この部分が検索表を兼ねているのだが，その仕分は，夏生［葉脈分枝 / 子葉に切れ込み / 葉脈不分枝］，冬生［葉脈分枝 / 葉脈分枝不鮮明 / 葉脈不分枝］と，ごく大ざっぱで，微妙な違いについては本文にまかせてある．本文の写真でも，成葉や花や果実はほんの添え物で，いろいろな発達段階の葉の細部やロゼットが示されていて，「早期の識別」に重点を置いたことがわかる．

著者は永年の雑草防除の職掌柄，どんなステージでも，芽生えの葉一枚からでも識別できることを目指してきたという．裏表紙の半分（11×8.5 cm）に，春の畑の若いキャベツ 4 株（現場ではたぶん 40–50 cm 間隔）の間の地面に生えた，雑草の芽生えを識別するクイズが出ているが，全 127 株のうち一番多いのはコアカザで，残り約 60 株が 12 種類に同定されている．こういう同定用の図鑑ができたからと言って，使いこなすには年季が必要だろう．別に紹介する大川式検索法に，利用の余地がありそうに思う．（金井弘夫）